第２回　防長倶楽部会員×山田奨学会学生

座談会「飛耳長目」

ゲスト：田子みどりさん

（株式会社コスモピア代表取締役社長、萩ふるさと大使）

左から児玉瑞歩さん、桝本鮎子さん、田子みどりさん、井内貴文さん、関谷健太郎さん

防長倶楽部では倶楽部会員と山田奨学会奨学生との交流、知見の共有を目的とする座談会「飛耳長目（ひじちょうもく）」を不定期で開催いたします。萩市出身で、女性企業家の草分け的存在として活躍中の田子みどりさん（株式会社コスモピア代表取締役社長）をゲストにお迎えし、奨学生がお話を伺いました。今回出席した学生は以下の四名です。

・井内 貴文さん（早稲田大学人間科学部四年、岩国高校卒）
・関谷健太郎さん（慶應義塾大学理工学部四年、慶進高校卒）
・桝本 鮎子さん（お茶の水女子大学文教育学部四年、宇部高校卒）
・児玉 瑞歩さん（お茶の水女子大学文教育学部一年、山口高校卒）
※学年は二〇二一年三月現在

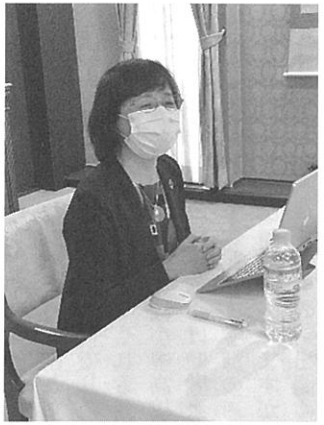
以下に座談会の一部を掲載します。

◆

田子みどりさん（以下、田子）：はじめまして、田子みどりと申します。私は萩市の出身で、萩高校から早稲田大学文学部に進学、在学中に起業し、一九八三年の卒業と同時に株式会社コスモピアを創立、今に至ります。自分でも信じられませんが、あと二年で創業四十周年ということになりますね。

大学進学で萩を離れて以来、生活の拠点はずっと東京で、今は中野に家族と一緒に住んでいます。若い頃は忙しかったこともあって、故郷のことを顧みることはほとんどなかったのですが、四十八歳のときに萩高校の東京同窓会の幹事をしたことがきっかけで、故郷の仲間との交流が再開し、萩市や山口県に関係する活動にも携わるようになりました。現在は萩ふるさと大使を拝命しているほか、萩市で一昨年始まった「熱中小学校　萩明倫館（※）」で教頭を務めています。

（※編集注　熱中小学校は大人が七歳の心に戻って学び直そうという目的で始まった一般社団法人熱中学園のプロジェクトで、現在、全国に十数校が開校している）



亡くなった母は小学校の教諭でしたが、定年までヒラの教諭でしたので、私が教頭先生になったのを見て、今頃草葉の陰で笑っているかもしれません。

このほか、山口県内で起業を促進するプロジェクトでも企業経験者として、お手伝いをさせていただいています。

■教員志望から起業家へ

桝本鮎子（以下、桝本）：今から四十年近く前に学生、しかも女子学生が起業するのは容易なことではなかったと思うのですが、起業のきっかけは何だったのですか？企業などに就職することは考えていなかったのですか？

田子：そもそも私が東京の大学に進学したのは、女性である自分に何ができるのかを探すためのようなものでした。当時の萩は今より封建的な傾向が強くて、外で働いている女性は教師か看護師さんぐらいで、他にはほとんどいませんでした。うちの母のように外で働く女性の子供は「かぎっ子」と言われていて、親も子も、なぜか少し肩身が狭い思いをしていました。「お母さんが外で働くと子どもが不良になる」なんて言われましたね（笑）。そんな時代でしたから、私も普通に行けば、大学で教員資格を取って教師になるんだろうな…と、なんとなく思っていました。でも、もしかしたら他にも何かあるかもしれない…、そう思って上京したのです。ただ、親の期待もありましたので、一応教員免許は取得し、母校・萩高校で教育実習も経験しました。だけど、どうもピンとこなかったんですよね。教科書に載っていることを教えることはできても、人間を育てることなんて自分にはとてもできないし、向いていないと思い、結局、教員採用試験は受けないことに決めました。親は私が教師になって山口に戻ると思っていたでしょうから、相当なショックを受けただろうなと思います。

教員以外の進路を模索し始めた私は、

大学二年生からある企画事務所でアルバイトを始めました。当時は女子大生ブームで女子大生というだけで割とちやほやされて、重宝された時代でしたから、アルバイトに採用してくれる会社が多かったのです。今では小中高校の授業でも自分で課題をみつけて考えてアウトプットをするという学びのスタイルが一般的になってきていますが、当時はただ机に座って先生の話を聞くだけの授業がほとんどでしたから、私も「自分で考えて表現する」経験がほとんどなく、不得手でした。企画会社でアルバイトをしたのは、このコンプレックスを克服するためでもありました。その会社ではいろいろな仕事をさせてもらったのですが、一つの転機となったのが、「女子大生と科学技術」をテーマに経団連のイベントでプレゼンテーションをする仕事でした。当時の花形産業でもあった科学技術の魅力を、科学技術とはまったく無縁の女子大生に表現させたら面白いのではないかという着想から生まれた企画で、当時大学四年生だった私も担当者の一人に選んでもらったのです。幸い、そのプレゼンは高く評価され、その後も同じような科学技術関連の仕事をもらえるようになりました。それで、一緒にバイトをしていた女子大生仲間と一緒に独立をすることになり、コスモピアが生まれたのです。

つまり、自分で勉強する機会を作ろうと外に出たことによって、いろんな人脈やチャンスに巡りあうことができ、タイミングを逃さないように一つひとつの案件にチャレンジしていったら、それがビジネスにつながったということですね。ビジネスになるとお金のやりとりが発生してくるので会社と言う組織が必要になり、それで会社を創り、会社には社長が必要だから私が社長になって…という流れで、大学卒業した翌月の四月二十八日、コスモピアを会社として登記するに至りました。

■「ご恩返し」でなく「ご恩送り」を

関谷健太郎（以下、関谷）：起業するにあたって、その後の人生を決定づけるような衝撃的な出会いはあったのでしょうか？

田子：すごくたくさんの出会いがあったので、一人に絞るのは難しいですね。私の場合は、ピンで出会うというよりも、組織として出会っていくほうが大きかったように思います。今に至っても非常に多くの人にお世話になっていますが、それは私個人とAさんという個人が一対一で出会って何かをしていると言うよりは、コスモピアやそれに属する仲間の集団と、また別の集団との出会いがあって、そこから何かが生まれていく…というイメージですね。たとえば、私がすごく大きな影響を受けたのは、二十代のときから参加している「日本ニュービジネス協議会（NBC）」という経営者団体との出会いでした。NBCでの活動を通じてベンチャーから大企業まで三百人を超える様々なタイプの経営者と密な人間関係を持つチャンスを得ることができ、実にいろいろなことを教えていただきました。すごく著名な経営者の方が私のような若輩者に真摯に向き合ってくださり、手取り足取り教えてくださったことも何度もありました。もちろんNBC以外にもこういった出会いの場がたくさんあったので、この四十年間でお世話になった人の数は数え切れませんし、とても全員には、ご恩を返し切れません。だから、私はご恩返しではなく、「ご恩送り」をしようと思っています。自分が先輩方にしてもらったように、若い人に自分の経験や知識を共有することで、先輩方から受け取ったご恩のバトンを若い世代に送っていきたいですね。

井内　貴文（以下、井内）：今でこそ学生の起業は珍しくなくなりましたが、当時はかなり大変だったのではないですか？

田子：起業して会社を創ることは、実はそんなに大変ではないんです。それよりもむしろ、創った会社を維持していくほうが大変でしたね。うちの会社はもうすぐ創業四十年になりますが、この四十年間、会社を「成長させてきた」と言うより、「なんとか維持してきた」というのが正直なところです。もともと私はこんなに長く社長をするつもりはありませんでしたし、途中で何度も辞めてしまいたいと思ったことがあります。私自身、自分が社長の器でないこともわかっていましたから、いつも自分が社長をしていることに違

和感があって、現実から逃げるように結婚して子どもを産んだりもしました。でも、三十代半ばになると、やっと地に足がついてきたのか、経営がすごく面白くなってきたんです。与えられた仕事をきちんとやって赤字にならないように気を付けていると、そう簡単に会社はつぶれないものだということがわかってきました。家計と一緒ですね。うちは女性が多い会社なので、皆でまさに家計を守るようにして、赤字にならないように仕事を続けてきた、という感じでしょうか。うちと同じころに創業した会社を見ると、女性社長の会社の方が根強く残っている確率が高いような気がします。男性社長の会社は、大化けしたか、消えてしまったかの両極端のような気がします。やはり男性は家計を守る感覚ではなく、投資して会社を大きくしようとする傾向が強いからでしょうか。

帝国データバンクによると経営者全体に占める女性の割合は8％くらいらしいです。四十年前に私が起業したころは3％くらいと言われていましたから、倍増はしているものの、世界的に見ても、まだまだ少ないですね。

井内：四十年間も会社を維持するのは難しいと思うのですが、メインの事業は創業時から変わっていないのですか？

田子：「科学技術をわかりやすく伝える」というコンセプトは変わっていません。ただそのコンセプトを実現する手法については、時代の流れやニーズに合わせて変化させてきました。創業当初は科学技術についての普及・啓蒙的な事業（テレビ番組の企画、出版、イベントなど）がメインでしたが、最近はもっぱらＩＴ系の事業がメインです。これからはＤＸの波にいかにして関わっていくのかが大きな課題で、目下、社内で定義づけの議論を進めているところです。

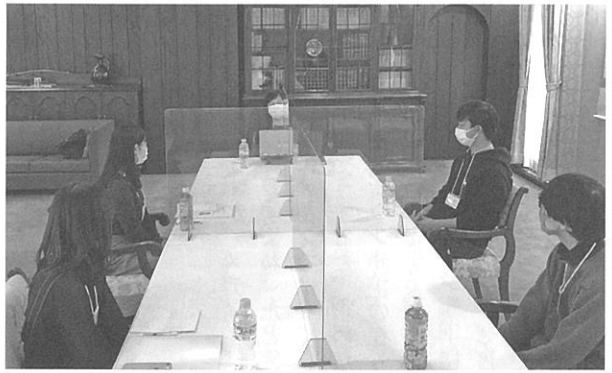
■知性・美意識・フットワークを大切に生きる

関谷：コスモピアでは、ワーキングマザーも多く働いているということですが、それは会社にどのような影響を与えていますか？

田子：この質問はよく受けるのですが、私たちからしてみると、ワーキングマザーって、人間の営みとしてごく普通

のことなんですよ。だから、あまり特別なこととして意識したことはないんですよね。ただ、一口にワーキングマザーと言っても出産前・後、子どもの就学前・後で、それぞれライフスタイルや家庭の事情も異なるので、それを見極めて仕事を割り振っていくようにはしています。

最近はワーキングマザーと一緒に働く男性たちの意識の変化は強く感じますね。うちに入社してくる男性は「ワーキングマザーにとって働きやすい環境は、自分にとっても働きやすい環境だ」という価値観で入社してくるんですよね。たとえば「残業はあまりしたくない」「家族に夕食を作ってあげたい」「子どものお弁当を作りたい」とか。育児って確かに大変ではあるけれど、楽しいものでもあるので、女性だけでなく男性も一緒に楽しめるような職場環境を整えることが大切なのかなと思っています。



関谷：私は二年後に大学院を修了して社会に出るのですが、仕事とプライベートはしっかり分けて、趣味の音楽を楽しむ時間を確保したいと思っています。田子さんは仕事とそれ以外の時間を意識して使い分けていますか？

田子：多様性はすごく大切なので、仕事以外のことに興味関心を持って活動することは、大賛成です。私も今は多少時間の余裕があるので、仕事以外にもいろんな活動や遊びを楽しんでいます。仕事をする上で私には知性と美意識（感性）、フットワークの3つは絶対に必要だと思っているので、どれもバランスよく磨いていきたいですね。知性については「編集学校」というところにずっと通っていて、「多読ゼミ」に所属して週に一冊のペースで本を読んだり、短歌や俳句をつくる講座にも参加しています。和太鼓はもう十年くらい続けています。和太鼓、良いですよ。音楽でもありエクササイズでもあり、心身に良い波動を受けることができます。あとは今はコロナで行けていませんが旅行も大好き。お酒も大好きです（笑）。

関谷さんも、ぜひ好きな音楽を楽しみながら、フットワーク軽く社会人生活を楽しんでください。

■「何をやるか」の前に

「何のためにやるのか」を考える

児玉瑞歩（以下、児玉）：私は今、自分のやりたいことと社会のニーズとが噛み合わないのではないかと悩んでいます。田子さんは会社のコンセプトと社会のニーズとをどうやって合致させてきたのですか？

田子：社会のニーズは刻々と変化していて、この先どうなるのかは誰にもわかりません。だから、目の前のことにとらわれ過ぎないことですね。目の前の「やりたいこと」だけを考えるのではなく、それをすることによって、結果として世の中をどうしたいのかを考えてみてください。その結果に至るための手段は、今、あなたが「やりたい」と考えていること以外にも、あるのではないでしょうか。逆に児玉さんがやりたいと思っていることは、今はニーズがないかもしれませんが、三年後、五年後にはニーズが生まれているかもしれません。上手く言えませんが、「今」にとらわれず、より深く広い目で、自分のしたいこと、成し遂げたいことを考えてみると良いのではないでしょうか。児玉さんは、具体的には、どんなことをしたいのですか？

児玉：報道の仕事に就きたいと思っているのですが、今の女性のキャスターやアナウンサーはタレント色が強くて、自分には向いていないのではないかと悩んでいます。

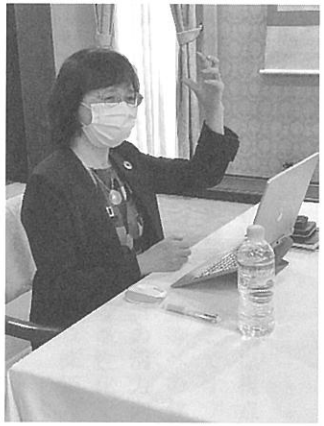
田子：報道そのものへのニーズはなくならないと思いますが、メディアは明らかに変化していますよね。たとえばテレビは明らかにメインではなくなりつつあります。そうすると、求められるキャスターやアナウンサーの在り方も当然、変わっていきますよね。まずは、「キャスターやアナウンサーに向いているのか」ではなく、「なぜ自分は報道がやりたいのか」を深掘していくと、もっと別の方向性が見えてくるのではないでしょうか？

児玉：大学生のうちにやっておいた方が良いことはありますか？

田子：やはり本はできるだけ読んでおいた方が良いですね。自分の好きなジャンルや専攻に関係のあるジャンルだけでなく、普段はまったく縁のないジャンルや知らないジャンルの本を読むのもお勧めです。一見、自分の専門と正反対の分野に興味を持つことで人間としての幅が広がって、かえって自分の専門性が磨かれることに繋がります。実際、優れた科学者には哲学や音楽、文学を愛する人が多いですよね。

統計を読むことも大切です。というのも、世の中に出回っている数字って、いろんな人の目論見とか思想とかが反映されてしまっているものが多いんですよね。だから、皆さんには、メディアが示す数字を鵜呑みにするのではなく、何のバイアスもかかっていない素のデータに触れる習慣を持ってほしいなと思います。例えば、特に各省庁が出している「〇〇白書」とか統計報告書のような信頼できる数字を自分の目で確認した上で、物事を判断する姿勢を身に付けたいものです。

桝本：私も田子さんと同じく、なんとなく自分は山口に帰って教師になるのかなと思っていて、音楽の教員免許を取りました。でも教授から「もう少し音楽の勉強を続けたら？」と肩を押していただいて大学院への進学を決めました。ただ、音楽の世界でも成長するためには、ある程度自分を意識的に売り込んでいく姿勢が大切だと実感することも多く、自己アピールが下手な私はどうしていいか、わからずに戸惑っています。田子さんは、どうやって自己アピールをしてきたのでしょうか？



田子：実は私もあまりアピールは得意ではないし、積極的に人前に出たいタイプでもありません。ただ、自分の「役割」として人前に出なくてはいけないときは、それが自分の果たすべき責任だと思って、なるべく断らないようにしています。ただ、それによって自分をアピールしているつもりはないんですよね。桝本さんも人前に出ることが苦手ということですから、あまり「自己アピールしなきゃ」と意識せず、周囲から望まれる役割を責任もって、きちんと果たしていけば良いのではないでしょうか。そうすれば、きっと桝本さんをひっぱってくれる人、前に押し出してくれる人との出会いに恵まれると思いますよ。

桝本：人前で話すのは苦手なのですが、リーダー役を求められることが多いのにも戸惑っています。

田子：人前で話すのは、私もいまだに苦手です。今日は少人数の会なので心地よく話せていますが、講演とかセミナーで話すと、後で落ち込むこともよ

くあります。落ち込んで忘れたくて、深酒をするっていうパターンですね（笑）。ただ、場数を重ねると慣れてきますし、話の構成をある程度組み立てて準備しておくと、人並みには話せるようになります。

それに、今までは人を引っ張っていくような強いタイプのリーダーが求められていたかもしれませんが、これからは引っ張っていくと言うよりも、一人ひとりの声を公平に聞いて、方向性を調整していく、いわゆるファシリテーション能力に優れたリーダーが求められていくのではないでしょうか。その意味でも、桝本さんは、リーダーに向いていると思います。自分で抱え込まないで、どんどん周りを巻き込んで、役割を振り分けながら取り組んでいくと良いと思いますよ。

司会：最後に学生の皆さんにはなむけの言葉をお願いします。

田子：金子みすゞの「蜂と神さま」という詩を贈りたいと思います。有名な詩ですが、私の友人のユニット（LunaLuna）がこの詩に曲をつけて歌っているので、今日はそれを聴いていただきたいと思います。

蜂と神さま　　金子みすゞ

蜂はお花のなかに、
お花はお庭のなかに、
お庭は土塀（どべい）のなかに、
土塀は町のなかに、
町は日本のなかに、
日本は世界のなかに、
世界は神さまのなかに。
さうして、さうして、神さまは、
小ちやな蜂のなかに。

出典：『金子みすゞ全集』（JULA出版局）

小さな蜂の視点からぐーっと広がって神様という宇宙的な視点になって、それがまた蜂の視点に戻っていくところが素晴らしいですよね。私たち一人ひとりが蜂で、それぞれの土地で生まれ育ち、今、その土地から出て、東京にワープしたんですよね（笑）。そして、東京の外側には日本、世界、宇宙が広がっています。皆さんの可能性も無限です。ときには蜂の目で、あるときは宇宙の目で見渡すと、また違った景色が見えてくるはず。時には視点や時間軸を替えながら、柔軟に未来を歩いて行っていただけたら良いなと思って、この詩を皆さんへのはなむけとしたいと思います。今日はありがとうございました。

（談）